

文学の杜

仙台文学館
友の会会報

第81号

令和8年7月20日発行

2026年度スタート

文学館友の会総会

友の会のアピールを

仙台文学館友の会の2026年度総会はゴールデンウィーク最終日の5月6日に文学館講習室で開かれた。会長の渡辺祥子さんの挨拶で始まり、事務局の伊藤美菜子さんが司会、渡辺会長が議長に就いて議事に入った。議案の討議では2025年度の事業報告と収支決算、監査報告を承認、2026年度事業予定案、予算案、役員について原案どおり出席者の挙手で可決された。続いて役員とサポーターが紹介された。

その他で「郵送代が特別会計から補助されているが、将来の予測は」との質問があり「この夏から文学館が大規模改修で休館するので、再開後を見て検討したい」と事務局が応え、会長から「会員を増やすのが最も望ましい。友の会イベントに興味を持って入会した人もいる」との発言があった。他に「配布物にも友の会アピールを載せたら」と提案があり「会報は市の施設にも配布しているが、情報共有の方法を考えたい」と事務局が応え

た。参加者は14名だった。

▽会長 渡辺祥子
▽副会長 寺嶋信
▽幹事 一文
字ひろみ
▽監事 近田裕子、長沼佐野のぶ
▽事務局 伊藤美菜子

総会終了後、特別展「美しい本」製本装幀家ティニ・ミウラのしごとについて、学芸員の佐藤友理さんから解説講座があった。一点一点手造りの製本装幀で、世界的に活躍した人が宮城にいたことを初めて知った。しかも特別展の準備を進めている途中で逝去したと聞いて、驚きながら展示会場に移動。鮮やかな色使いの作品展示にため息がもれた。



創意工夫で輪をつなぐ

会長 渡辺 祥子

毎年5月の大型連休の時期に開催している友の会総会。眩しいほどの緑が館を包んでいる光景を目にしながら、会員の皆様と、この周辺環境とともに文学を紹介して交流できることを大変うれしく思い、先輩方が丁寧につないできた縁をしつかり受け継いでいかなければならないと、あらためて感じました。

近年は遠出をするような催しが難しくなっていますが、出来る限りの創意工夫で、友の会ならではの活動を続けていきます。昨年度は、文学館の良き周辺環境も紹介しようと続けている会報誌担当者が綴ったエッセイと、写真家・佐々木隆二さんの写真とのコラボレーション企画で好評いただきました。会報誌も毎号丹精込めて制作しております。形は変わっても文学を囲む輪は決して絶やさないという思いで取り組んでいます。

今年8月末から文学館は改修工事のため休館に入りますが、今年度も工夫を凝らして運営をして参りますので、皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

文友一滴

クマのぬいぐるみをもつて蒼君が遊びに来た。愛称はあーくん、3歳。それを見て私は「かわいいクマさんだね」と声を掛けてから「桜ヶ丘6丁目に出た熊があーちゃんと遊ぼうって寄ってきたら怖いよ」と言ってしまった。なんという意地悪ばあさん。「そんなことはないよね」と言い訳をして、庭の花を摘んであげた。その後で色々考えた。なぜ熊と共存できないのかと。最近、私たちは、地震雷熊騒動と自然災害の多いことにびくびくしながら生きている感じがする。ある時泉ヶ岳の麓の温泉に入った。下界には仙台の町が一望できそれはそれは気持ちよくいい気分だった。でも時折、ばーんばーんと鉄砲の音らしいものが聞こえてくる。たずねたら熊威嚇のための銃声だそう。そのために熊は山の奥ではなく市街に出てくるようになったのではないかと訝っている。あーくんのクマのぬいぐるみのように絵本にも童話にもディズニールランドでも、熊本県のキャラクターくまモンまで、至る所で熊は愛されているように思う。それが日本だけではなく世界的に愛されるキャラクターになっているのだ。西洋では出産のお祝いにクマのぬいぐるみをプレゼントする慣習があるそう。強い子に育てと祈りを込めるのであろうか。児童小説の『クマのプーさん』『なめとこ山の熊』『絵本の『はなをくんくん』『くまさんくまさん』にみてるの？』などの本は今でも人気がある。

夢があり優しさがありの熊。でも人を襲うのではそんなことばかり言ってはいられない。なぜ市街地にまで下りて来るの？ 熊の居場所をなくしたのには、人間ではないのか。共存するためには各自自治体で解決策を取るだけでは、近ごろの熊騒動を平定することはできない。もっともつといい案はないものだろうか。

(一)

佐伯一麦 北根ダイアログ2026

—木村紅美さんを迎えて—



佐伯館長がゲストと語る「北根ダイアログ」7回目の今年は5月24日仙台文学館講習室で行われた。ゲストの作家木村紅美さんは、ミントグリーンの爽やかなシャツドレス姿で登場。進行役から短い紹介があった後、対談が始まった。

冒頭、今年第9回仙台短編文学賞の選考委員を務めた感想を聞かれて、盛岡在住の木村さんは仙台に来ることが増えたことと答えて、今まで選ばれる側だったが、選ぶことを体験して、やはり最初に読んだ印象に戻るということがあったと話した。

仙台との縁については、1988年千葉県から仙台市に引っ越して向山小6年に転校、そこでいじめに遭った体験を具

体例を挙げながら話した。当時は学校が荒れていた時代で、先生たちの対応にも疑問を持ち、疎外感や孤独感を抱いたという。「けれど後にはそれが小説の元になる」と館長が続けると、木村さんは大きく頷いた。中学高校時代には図書館に通い本を乱読、部活も楽しかったという。読書体験談では、児童文学から映画、アニメまで、影響を受けた本の話題が広がった。作家志望について「小学2年の作文に書いたが、時間が経つうち無理と思い、大学卒業後会社勤めをしてから、やはり書きたいと思った」と語った。

2006年デビュー以来書いていて、2011年東日本大震災の後一時書けなくなったことでは、館長が自身の体験を語り、「時間が経って、小説の中に見えてくるものがある。2025年の第61回谷崎潤一郎賞を受賞した『熊はどこにいるの』はそうした延長線にある」と話した。「実はこの作品は2年前に考えたもので、ラストに行き詰まり、題名も決められず苦労したが、出版したら世の中が熊出没となっていた」と木村さんが語った時は会場の空気がゆれた。

館長の問いかけに、すぐさま早口で応える木村さん、コロナ禍のできごとや、小説の書き方など話題は多方面にわたった。

予定時間を超えて盛り上がった北根ダイアログ、最後に今後の予定を館長が聞くと「不動産業界のこと」と明かしてくれて終了した。

(近)

第72回読書会

二面性がもたらす現実

辻仁成『海峡の光』

残酷さと優しさ、激しさと穏やかさ、拒絶と受容、人間の誰でもが持つであろう「二面性」をここに見る。この芥川賞受賞作は、函館少年刑務所に勤務する男と受刑者の男の、18年を隔てた邂逅の物語である。

刑務官の斎藤は、小学生の時に受けた壮絶ないじめの経験は今も心に抱え込んでい

る。入所して来た花井は、そのいじめの張本人であった。変貌した同級生の刑務官に、受刑者は気付かなかった。

ふたりの男の葛藤、複雑な心理、変容がみ

は何かというところに収められる。
*斎藤にとって花井は、復讐と友情の両方の対象だったのではないか。
*花井は、自分が実社会に適応して行けない人間だと気付いている。
*入所した時から花井は斎藤を分かっていたのだと思う。
*函館が良く描かれていて、行ってみたくなった。
4月8日 3名出席。

(佐)

ごとな状況描写で描き出される秀作。
*全体的に強い印象ではないのに、心に残った。
*人の業、人間とは何かというところに収められる。

第73回読書会

真実か偽りか、老女の語る物語

丸谷才一『樹影譚』

今と昔が交錯する3部構成の本作は、ミステリーのようにも読め、小説の面白味を堪能させるものであった。

作家古屋は、土地の旧家の老女から強引に自宅に招かれる。そこで語られた物語は、彼の知らなかった過去の真実か、あるいは老女の妄想か…。

*書き出しの部分が良いと思った。
*難しいので、他の人はどう読むのか知りたかった。
*読書会でなければ読むことのない作品だった。
*「小説論」という感じがした。

員を迎えて8名出席。

*読み終わって満足感があつた。
*光と影の調和がすごい。
*今この本に出会えてよかった。
6月10日 新会

次回読書会テキストは、

吉村昭『三陸海岸大津波』(文春文庫)

*次回読書会は10月の予定ですが、日時は8月中旬に決定します。なお、8月末から大規模改修工事による休館に入るため、文学館講習室が使用できなくなり、仙台市民図書館2階閲覧室を借りて開催します。参加を希望する友の会会員は、事前に友の会事務局まで、お問い合わせください。

『月と六ペンス』

サマセット・モーム

ロンドンで証券取引所の仲買人をして

いるチャールズ・ストリックランドは、ブルジョア階級の平均的家庭といえる生活も、安定した仕事も投げ捨てて突然パリへと旅立った。40才の時である。彼の妻の依頼を受けて、作家の私はパリで彼に会う。答えは「絵を描きたい。家にはもう決して戻らない」だった。

こうしてストリックランドの絵描きとしての生活が始まる。彼は快適な生活には興味無く、キャンバスと絵の具さえあればよかった。貧しく不潔な生活の中で絵を描き続けるが、自分の絵に満足せず何かをつかもうと苦しみ続ける。

パリでただひとり彼の絵の才能を認めていたのは、平凡な画を描く画家ストルーヴェだった。彼は「美とは芸術家が世界の混沌から魂を傷だらけにして作り出す何かだ」と献身的にストリックランドを支えた。しかしストルーヴェの貞淑

な妻が、感謝も反省も同情もない冷酷なストリックランドに恋をするという、思いがけない出来事が起きてしまう。

この恋の顛末は、男と女の感情を描いてみごとである。妻の裏切りを信じないストルーヴェ、戻らない妻、平然としているストリックランド。夫の辛さ、悲しさ、嫉妬心と、妻の冷たい行動が目前に立ち上がって来て胸に迫る。モームは「男の魂は宇宙の果てをさまようが、女はその魂を家計簿の項目に入れたがる」と奥深い表現をしている。

放浪の果てにストリックランドはタヒチにたどり着き、死を迎えるまでこの島で暮らすことになる。死後、ここで描いた絵が画家としての名声を確かなものにする。

本を片手に、私は巧妙な筋立てにうっとりする。この小説にはふたつの核があり、それが無二のものとしてつながり、人の生き様を示して読み手の心をつかむのではないかと。時々顔を出すユーモアもいい。

芸術に関わる人間の、表現によって解き放たれようともがく精神の有りようや、探究心を描く名作である。100年前の世界的ベストセラーの新訳に拍手。

『月と六ペンス』サマセット・モーム

新潮文庫

(佐)

天窓からの陽射しの中で

第29回ことばの祭典

短歌・俳句・川柳へのいざない

6月28日、梅雨晴れの日曜日、仙台文学館で第29回「ことばの祭典」が開催されました。参加者は162名でした。午前10時、「題」が「紙」もしくは「揺れる(ゆれる)」と発表され、同時に受付が開始されました。

このイベントは部門の垣根が無い合同吟行会で、参加者は各部門に一作品を応募することが出来ます。今年も参加者の多くが複数の部門に応募していました。



このような形式での吟行会は全国的にもまれな催しのことです。

今回は若い人や親子連れの参加者が増えました。そのせいか「ことばの祭典」の利用者が多く見られました。天候に

恵まれたので、庭の水辺のそばに腰掛けて創作に集中する姿も見受けられました。1時間半の吟行の後は昼食の時間、友人とお弁当を食べている若者の姿はとも楽しそうで、学生時代の昼休みを思い出させてくれました。レストラン「びざしの杜」の特製弁当を楽しみにしている方も多かったようです。

選者講評では、「最高賞である『ことばの祭典賞』受賞作に共通しているのは、時代を反映した社会的視点と具体性があること」「仙台文学館の『ことばの祭典』だからこそ残す意義のあることばがある」「題があることで生まれた発想があった」などが印象的でした。

選者は、短歌部門・三井修氏と梶原さい子氏、俳句部門・阪西敦子氏と高野ムツオ氏、川柳部門・月波与生氏と雪石隆子氏でした。友の会は、応募用紙の配布と作品受付の手伝いをしました。

(和)

『ことばの祭典賞受賞作品』

◇短歌部門
父のあし会社は名前を三度変へ需要の減りゆく紙を製れる 森 純一

◇俳句部門
紙魚走る戦後の文字を食みながら 木立時雨

◇川柳部門
揺れる中皆を信じててんでんこ 加藤鈴枝

私と文学・15

映画と井上ひさし

ここに「大アンケートによる洋画ベスト150」(文春文庫)という色褪せた本がある。映画通が選んだ映画を、ランク付けしたもののだが、選者の一人井上ひさしはベスト1に、1951年制作のイタリア映画『ミラノの奇蹟』を挙げている。掘立小屋で暮らす貧民が立ち退きを迫る地主らに対し、身寄りのない青年を中心に結束、抵抗する姿を描いた群像劇。軽妙な笑いを醸し出し、現実と夢が混ざった寓話のような雰囲気がある。これは井上作品に相通するところがある。観てそう思う人がいるかもしれない。

最近、植田紗加栄著『井上ひさし外伝』(河出書房新社)を読んだ。映画と井上の関わりを追った評伝だ。本書によると、井上は仙台一高に進学するが成績振るわず、それならば「おもしろいお話を考える職人になろう」と決意。そして、映画からその技を学ぶべく午後の授業に出席せず、映画館に行く許しを担任に願い出

る。担任は条件付きでこれを許す。以来、毎日のように映画館に通い、洋画邦画問わず片っ端から観たという。

比べるのもおこがましいが、私も高校生のころ、よく映画館に足を運んだものだが、井上の映画熱には到底及ばない。漫然と観ているのとは訳が違う。気に入った映画は繰り返し観、暗闇でメモを取っていたという。『ミラノの奇蹟』もそうして観ていたに違いない。「映画館の暗闇から井上が生まれた」の表現にうなずく。それにしても、個性を見抜いていたと思うが、担任は井上の願いをよく許したと思う。何か運命のめぐり合わせを感じる。

おもしろい話を紡ぎ出し、数多くの作品を世に送り出した井上ひさし。井上文学の源流を探っていくと、そこに映画があった。映画好きの私はどこか親しみを覚える。(其田敏美)

「私と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

人々のエピソードで構成されている。それが夜空に煌めく星座のように浮かび上がって、著者の劇場への熱い思いが伝わってきた。今、帝劇は建て替えのために休館中。2030年オープン予定。楽しみに待っている。(もんちゃん)

「文友の部屋」の原稿募集

1500字程度で、会員のみなさまの声を寄せてください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

文友の部屋

石牟礼道子の文学には、かそけき音と、かすかな匂いと水の流れが有り、それが作品を緩やかに包んでいる。音ゆえか、水ゆえか、更に天草の柔らかな方言ゆえか、読めばその場所へ運ばれる。水俣病の苦しみをつづさに明かした『苦海浄土』も、狂女の祖母を描いた『十六夜橋』も、底に流れている優しさが静かに沁み

も、底に流れている優しさが静かに沁み来る。
*小川洋子著「劇場という名の星座」を読んだ。帝国劇場の記憶を描いた短編集である。舞台スターではなく劇場に関わ

風と歩こう 30



Photo by Ryuji Sasaki

文学館の駐車場からエントランスへ向かう時には、視線は下を向く。転ばないように気を付けている、というより今日は何が咲いているかなと、大木の根元を見ている。ハルシオン、スマイル、ヘビイチゴ、見つけるとホッとする。松ぼっくりやシダローズを見つけると、鼻歌が出るほどに嬉しくなる。きれいに草刈りがされていると、申し訳ないけれどガッカリしてしまう。

この館の周辺は落葉広葉樹が多い。芽吹きから若葉、新緑そして万緑から紅葉、落葉へと五感を楽しませてくれる。コナラは、芽吹きと共に房状の花をつける。その後、藤が甘い香りを放って開花を知らせる。バス通りからの坂道に、覆い被さるように枝を伸ばす桜は葉桜となり、赤い小さな実を付ける。梅雨を知らせるように栗が白く咲き始める。
今年も暑い夏になりそうだ。窓から眺めて、台原の森を空想散歩しよう。サルスベリはあの道だっただろうか。合歓木はどこだったろうかと。(和)

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第81号をお届けします。

▽NHK「日曜美術館」の展覧会情報として仙台文学館の特別展「美しい本製本装幀家ティニ・ミウラのしごと」が紹介された。多くの美術館が出ている中で、仙台文学館が紹介されたのはなんだか嬉しくて小躍りした。できることなら、建物自体も全国的に放映してもらいたかった。(一)

▽早くも猛暑の兆し。気象予報の度、適切にエアコン使用の連呼だ。ラジオ子ども電話相談で、地球のため電気を節約するよう習ったのにおかしいのでは、という質問があった。気象予報士は、まず人間の命を守ることが大事、最近では省電力のエアコンも開発されていると答えた。科学者が解決法を見つける可能性もあるからと。質問をした子どもは、納得しただろうか。(近)

▽信号待ちをしていたら、歩道の木漏れ日が目に入った。光と影がクッキリしていて、そよそよと揺れている。まるで泳ぐ大魚のようだった。旧約聖書のヨナを飲み込んだ魚は、こんなだったのかなと想像した。信号が変わって走り出しても、それは頭の片隅に残った。我ながら不思議な連想ゲームだった。(和)

▽目の前を、幼い女の子を抱いた若い父親が公園への道を歩いている。「○×△×○」意味不明、女の子が何と言っているのか私には全く通じない。けれどお父さんは、直ぐに応えた「そうだね、公園でブランコね」。なんて素敵な会話だろう。言葉が通じるということの基本的形。(佐)